

足利学校新論 (下)

和 島 芳 男

目 次

- 一、足利学校の創立
- 二、饒阿寺と足利学校
- 三、上杉・北条二氏との関係（以上前号）
- 四、足利学校の学風（以下本号）
- 五、足利学校と易学
- 六、歴代の席主と学徒
- 結 語

四

さて続本朝通鑑卷一百六十三、永享十一年閏正月、上杉憲実が五経注疏を足利学校に寄進したことの条に、学校に伝存する憲実の状と称するものを引いて、

凡漢土自国学至郷校、非儒者無司業、聞綿竹惟以僧為之主、今本朝州学存者、僅有数焉、率亦僧為之主、野之学為最、言者曰、眡服而為縫掖之行、何乖戾甚、雖然、文字教授、有庶幾焉、故我以五経疏本若干卷、安置于学

舎、自今講習無怠、則文化之行、自家達于郷、達于州、達于国家天下、可指日而竣矣、嗟夫宝惜珍藏、寿育金石、主者思之、

とある。この状は今その原本はもとより、写本も学校に存しないので、これを果たして憲実の状と認むべきかについては、なお疑問の余地を存しなければならないのであるが、その内容についてみれば、いわゆる憲実の学校再興の趣旨を反映するものと解して大過ないであろう。かの文安三年の論達に見える通り、憲実の期待するところは、禅僧を庠主に戴く儒学専門の足利学校が教学機関としての權威を確立し、足利荘内文化に対する主導的地位に高められることにあったからである。従っていわゆる永享の再興の後、大永ごろに至るまでの足利学校の蔵書のうち、現存の分のみについてみても、かの上杉一族の寄進した五経疏本や後漢書・孔子家語を根幹とし、これに加うるに学校来遊の徒が書写または買得の上、学校に寄せ置いた周易・周易伝・易学啓蒙通釈・書経集注・詩集伝・周礼・礼記集説・孟子注疏解経などを以てし、このほかになお歴代庠主の手写せるもの、またはその書き入れあるものに北条氏政寄進の文選を始め、古文尚書・毛詩鄭箋・論語集解などがあり、かの文安の論達にいわゆる三注・四書・六経以下の講究のために必要な漢籍が追々整備されつつあった様子をうかがうことができよう。然るにかの前にも引いた桂庵和尚家法倭点に岐陽方秀の説を紹介して、

建仁竜雲有論語集注、其卷末有書岐陽和尚講筵之説之本、云、大唐一府、一州、其外及郡県、皆有学校、日本纔足利一処之学校、学徒負笈之地也、然在彼而称儒学教授之師者、至今不知有好書、徒就大唐所破棄之注釈、教誨諸人、惜哉、後來若有志本書之学者、速求新注書、而可読之云々、

とあり、足利学校が古注を墨守することを難じている。しかし上掲の書目においても、易学啓蒙通釈（写本一冊、一牛寄進）、周易伝（応安五年旧鈔三冊、大奇寄進）、書経集注（写本六冊、宗理寄進）・礼記集説（元天曆元年刊、五冊、延徳二年一牛寄進）の如き新注書が見えるから、岐陽の非難は必ずしも当たらないのである。それに室町季世に

久しく庠主をつとめた九華の自筆所用本に就いてみれば、尚書は孔安国伝・孔穎達正義、毛詩は鄭箋・孔穎達疏、礼記は鄭注、論語は集解・皇疏・邢疏、孟子は趙注・孫疏に、それぞれ新注を書き加えており、なお近世初期の庠主三要・寒松の書き入れのある孟子趙注零本二冊にも新注が頻りに引用され、学校が年代を経るとともに、ますます多く新注を取り入れた事実が見受けられるのである。この新注の摂取とともに足利学校の学風の今一つの特徴をなしたのは、清家点に準拠しながら、関東の方言にひかれて特別な訓法を有するに至ったことである。例えば伯禽^{キョウ}を伯禽^{ギン}、杜預^トを杜領^ド、初九^ツを初九^{シウ}と読むが如く、一般に濁音・拗音を用いることが多いのである。京都大学蔵清原宣賢自筆自点本中庸章句の奥に、

僧俗学徒、関東学士、十三經訓点清濁、悉背先儒之説、且失師家之伝、悲哉、予憐子孫赴邪路、一字不闕点之、

亦清濁字声指之、^一為令読易、^二不依仮名使、^三是亦一之術也、^四可深秘而已、

侍従三位清原朝臣（花押）

俗名宣賢法名宗尤
号環翠軒

という、この「僧俗学徒、関東学士」は足利学校関係者を指すに相違なかるべく、従って宣賢のこの識語は、関東訛りによる家点の歪曲につき、清家の家学を護持せんとする者の不安と不満とを端的に表白したものにほかならないのである。かの昔の岐陽といい、今のこの宣賢といい、いずれも上国の鐸々たる学者が、遙か関東の一隅なる学徒の振舞につき、とかくの関心を持たざるを得なかったのは、かの天文二十年のサビエルの書翰にも「坂東の大学には四方より攻学の徒雲集す、かくて学徒その郷国に帰るや、おのが学びたる所を以て郷人に授くるなり」という通り、足利学校が夙に諸国の篤学者の笈を負う所となり、またここで業を卒えた者がその到る所において活躍の場を見いだしたからであるが、学校の名声をかくも天下に高からしめた所以は、その経学よりもむしろ易筮にあったようである。

注

（一）これらの蔵書の一々についての詳細な記載は川瀬一馬「足利学校の研究」二〇〇頁以下参照。ちなみに現存足利学校遺書の

中に永享再興以前の寄進と認むべき本が見当たらないのは一つの問題であろう。足利衍述「鎌倉室町時代之儒教」五九四頁に、経籍訪古志一に応永十一年鈔本の礼記集説を著録し、「於足利庄今福郷書、応永十一年季陽二旬九日誌」の奥書を記したのを引き、今福郷は足利の隣りであるから、この書は足利学校に学んだものの鈔写であらうといっている。

(2) 第三節注9に同じ。

(3) 川瀬前掲書二〇九頁。なお足利前掲書六〇六頁には室町時代における学校所蔵の新注書として周易本義以下二十二部を列挙する。

(4) 川瀬前掲書二二二頁以下。

五

足利学校の蔵書目録の中に易類が多数を占めることは顕著な事実であるが、学校の易学については、かつてここに遊学し、後に近江山上永源寺に住した柏舟宗趙の周易抄に収められた周易要事記の中に、

或本ニ云フ、凡ソ易経倭点ト云ヘドモ、先ヅ江家、菅家ノ二点也、江家ハ貴備大臣家也、菅家ハ北野君家也、京師ノ諸儒ハ或ハ江家ノ点モアリ、又ハ菅家ノ点モアル也、足利ハ皆菅家点ヲ為本也、

とある。⁽¹⁾菅原氏は元来博士家中最も保守的態度を持しようであるが、それでも前代以来の学界の風潮にしたがい、追々宋学を兼修し、ことに周易の研究には最も力を注いだと見え、かの家学の積極的革新によって隆運を得た清原氏さえ、周易については菅家点に準拠したことは足利衍述の指摘した通りである。⁽²⁾これにつき川瀬博士は、かつて貞治年中菅原豊長が関東に下ったとき、恐らく菅家点による講筈を開き、その地の五山經流もまたその席に待したに相違なからうから、南北朝の末葉から室町初期の鎌倉の僧学徒がその流れを汲み、その影響を蒙っていることもまた容易に推定せられるところである故、鎌倉で修学した者がその伝統を足利に移植したのは当然と見なければならぬと思

うと論じた⁽³⁾。もしこの川瀬説に従い、足利学校の易学が菅原氏の家学を祖述するものにほかならないとすれば、その易学はすでに清原氏が自家の家学の中に包摂したものと選ぶところがなく、従ってそのような易学のみによって足利学校の名が特に喧伝せられるいわれもないであろう。現に柏舟の周易抄の乾伝の条には、

易ヲ伏犧ノシタ、文王ノシタト云ハ、事ニ顯タ易テコソアレ、無始無終ヨリ易ハアルソ、天地已前ヲ太極ト云、太極ト云モ散々ノ事ソ、真実ニ易ハ名ヲツケラレヌソ、先儒不得已太極ト名ヲツケルソ、太極ト云ハ無極也ト云ソ、天地不分、陰陽不分已前チャホトニ太極ト云ソ、言端語端ニワタル易ハ其カラ起ソ、

全体としては周子の太極図説の祖述にはかならず、後文もまた朱子の易学啓蒙に拠って敷衍したまでであり、なお各卦の条において儒釈不二・三教一致の理を説いていることも足利衍述の説明の通りであるが⁽⁴⁾、これらはみな、例えば岐陽らが早く先鞭をつけたところであり、別して学校の特色というほどの新味を見せたわけではないのである。

それにもかかわらず、学校が易学関係書を最も多く備えるほどの熱心を見せたのは、経学としての易学が、占筮としての易筮の基礎学をなすばかりでなく、易筮が当時の武家社会の実際的要求に適合し、足利学校出身者がその名を揚ぐべき出世の場に直結していたからであろう。周易要事記によれば、本邦における易筮に諸流あるうち、真言流は三善清行の弟日藏から小野僧正仁海に授けられ、さらに五伝して藤原信西に至り、宿曜流は清行の子浄藏から七伝してまた信西に至り、「今之易中興、多出自此信西」とある。柏舟も多分学校の占筮は信西に淵源したと考えていたのであろう。なお周易抄五需の条に左の記述がある。

鎌倉チ易ヲ聞ク時、我師ハ喜禪ト云人ソ、其師ハ義台ト云ソ、喜禪ノ語ラレシハ、我義台ニ伝易ノトキ、鎌倉持氏ノ衷乱ニ逢ソ、其時撰著占天下乱トキ、需ノ上六ニ逢ソ、有不速客三人来云々、自爾以来不見其可否ソ、此シルシヲハ、今マテマタ不見ソ、後ニ鎌倉ノナリヲ御覽セヨト云ハレタソ、其後重氏出頭ノ時、足利ニヨイテ講易

時、彼著ノ事ヲ沙汰スルニ符節ヲ合スルカ如クソ、其故ハ重氏出ル時、舍弟三人不速来テ重氏ヲ扶クルソ、(中略)重氏モツツシミテ居ラレタニヨツテ貞吉ナソ、今マテ無為ナルハ奇特ソ、易ヲ信シテ著ヲ取ハ、チカワウスコトテナイソ、

これによれば、柏舟の師喜禪は応永二十三・四年、いわゆる禪秀の乱のころ、鎌倉において義台から易を伝受し、その後三十余年を経た宝徳元年、成氏が関東管領に擁立せられたころ、喜禪は足利に来てみずから易を講じたのであらう。その後柏舟は鎌倉・足利における遊学を終って近江に帰り、永源寺の住持となったのであるが、あたかも応仁・文明の乱に際し、京都の兵火を避けてこの寺に寓した者の中には横川景三・景徐周麟・桃源端仙ら五山の碩学も少からず、みなこの機縁を喜び、柏舟に請うてその易説を聴いた。桃源の著、百衲襖第廿三の識語によれば、

与派、蓍玉之二老、曾在足利、学易之日、至於閤算、雖有師説、甚不曉了、二老相校讐撰之、与派者今講主柏舟師也、余写之入百衲襖、

とあり、なお同書卷一には次のような記事を載せている。

柏舟師ノ云、足利テ易講ヲ聴タハ、百四五十日ニ畢ルソ、其ワ初カラ説ンテ、繫辭ハ百日ハカリノ時分テアツタホトニ、能化モ聴徒モクタヒレタル時チャホトニ、大概ニシテトヲツタソ、其時カラ思タソ、易ヲ説ナラハ、先ツ繫辭カラ説テ能ク心得タラハ、今ノ本經ハ様モアルマイト思タホトニ、今度長好院テカラ次第ヲ弁道ノヨウニ思案シスコイタトテ、最初ノ日ハ易ノ正義ヲヨンタソ、

これらの百衲襖の記載は、柏舟がその学友蓍玉とともに足利に在った当時の学校の易講の實際をうかがうべき貴重な史料であるが、足利学校の易が上国においてますます名高くなったのは、柏舟が五山の碩学に易を講ずるに際し、かれの足利における思い出をかくも鮮明に語ることがたびたびに及んだためでもあらうと思われるのである。なおかの周易抄は、右の柏舟の永源寺における易講の草案にもとづき、聴講者の一人であった景徐の協力を得てこれに校訂を加

えたものらしく、その柏舟自筆本の巻末には左の記文がある。

文明丁酉十月廿一日始之、十一月十七日終之、自始到終、与景徐麟藏主、講罷講讐、夜以繼日、余過半聽瑩、聞筆者多、到節角處、今景徐連誦數過、或添或削、盖余所筆、乃景徐所筆也、而義理之異、烏焉之同、後之見者、正其誤可也、

予昔於武州箕田県、就希禪禪師學易、時卅一歲也、今以余所學易并三ヶ秘訣、尽以奉授小補翁与景徐老、無余蘊矣、盖余易小補之易也、第恐所聞寡陋、不適小補之意也、

文明丁酉十一月廿一日

柏舟 叟宗 趙

さてかの百衲襖卷一の文によれば、柏舟は足利学校の易講には甘心しなかったようであるが、それにもかかわらず、易を読むにはまず繫辭を理解すればよいと思ひ定めたというのは、かれがすでに箕田で師事した希禪から繫辭に重きを置く宋代易学の特徴について教えられていたからかも知れない。それよりも注目すべきは柏舟が希禪から「三ヶ秘訣」を伝受したことである。これは恐らく易筮の秘伝であらうが、かかる秘伝が易の学理と不可分の關係において授けられたことが、足利学校の占筮に対する武家の信用を増した所以であるらしい。有名な甲陽軍艦にいう、

甲州西部十日市場と云所に徳巖と云半俗有、此者甲州市川の文殊へこもり、夢想に八卦を相伝仕りたりとて在所にて占を能致す、長坂長閑今の徳巖を崇敬して、(中略)披露申す、信玄聞召、占は足利にて伝授かと尋させ給ふ、長閑承り、八卦にて候が、市川の文殊へこもり、夢想相伝とて、種々上のきどく有証拠を半時計申上る、信玄公聞召、六ヶ數學問を、目にもみえぬ文殊の夢に相伝は皆偽の至也、再如此者のこと、誰にても我前にていはんは曲事たるべしと宣ば、長閑赤面して無面目仕合也、

この「六ヶ數學問を、目にもみえぬ文殊の夢に相伝は皆偽の至也」というのは、易筮には深奥なる易哲学による基礎づけがなければならぬとするものであり、さすがに信玄の見識であるが、その際の信玄が、足利学校の易断こそ、

確乎たる学問的基礎の上にあるものと信頼していたことこそ見落すべからざる重要事実である。後年庠主三要が関が原の役に家康に従い、家康直筆の「学」の字を書いた指物を与えられ、出陣ごとに日の吉凶を占い、また毛利輝元のために萩城築造の可否を卜したのも、足利学校の易に対する伝統的信用に根ざしてのことであった。川瀬博士が「学校の事実上の教学目的は易筮にあり、而して其の修業者は業成って郷に帰るや、武家の為に易筮を行い、軍配を見、且つ又、兵書を講じ、其の兼才ある者は医療をも施す等、いはば軍事顧問的な役目を果たしたものと考ふべきであるから、学校の存在意義も亦、更に重要性を加へるものと言はなければならない」と主張するのは、戦国の名医と知られた田代三喜や曲直瀬直三がかつて足利学校に学んだ事実をも併せ考えてのことであろう。また前にも引いたように、天文二十年のザビエルの書翰の中に「坂東の大学には四方より攻学の徒雲集す。かくて学徒その郷国に帰るや、おのが学びたる所を以て郷人に授くるなり」と見え、平泉博士はこれを以て足利学校が師範学校として立っていた証拠としている。⁽⁸⁾しかし足利の学徒が帰国後武家のために奉仕し、あるいは郷人のために授けるところが第一に易筮であつたとすれば、それは足利学校の教学目的が、いわゆる永享再興の当時とは異なり、経学よりもむしろ実学に重点を置くに至つた結果としなければならないが、この足利学校の変質過程は、さらに歴代の庠主や後の人物史の上から見きわめられなければならない。

注

(1) 桃源瑞仙の百柄櫓にも「凡ソ、易经ノ倭点多シト云ヘドモ、先ヅ江家・菅家ノ二点ナリ、江家ハ今ハ則亡ブゾ、足利ハ皆菅家ノ点ナリ」とある。これも柏舟から聴いたところによつて述べたものであらう。

(2) 足利衍述「鎌倉室町時代之儒教」四九〇頁および五三五頁。

(3) 川瀬一馬「足利学校の研究」二二三頁。川瀬博士はここで鎌倉における菅家の学の伝統を足利に移植した者を足利学校庠主快元としている。しかしその当らざることは次節に論評する通りである。なお注(5)参照。

(4) 足利前掲書六三四頁。芳賀幸四郎「中世禅林の学問及び文学に関する研究」七九頁。

(5) 足利前掲書六二二頁にこの条を以て柏舟がその師快元の語を録したものと見、従つて文中「我師ハ喜禅ト云人ソ」の「我」は快元なるべしと解している。その論拠は柏舟が喜禅に師事した所は武蔵箕田であつて鎌倉ではなく、禅秀の乱のときには柏舟はまだ東遊していないというにある。しかし柏舟が喜禅に師事した所を箕田のみに限るべきいわれはなく、喜禅の談話は追憶談であつて必ずしも禅秀の乱の当時に語られたものではない。川瀬前掲書三三頁も足利説を襲用しているが、これまた易を以て知られた足利学校の中興第一世庠主快元は易の達人でなければならないという先入観にとらわれたものである。快元については後の論述参照。

(6) 成簀堂文庫蔵柏舟自筆本周易抄卷末識語。なお足利前掲書六三四頁に希禅・喜禅を同一人とするが、両者別人であつてもこの論考のためには妨げはない。

(7) 学校由来記。毛利家文書。川瀬前掲書二三九頁参照。ちなみに新村出「足利学校の盛時と西教宣伝」(第三節注13参照)にポルトガル某図書館蔵フロイス編日本史の写本をマードックが抄録したる一節を引き、「日本の諸大学と云ひても、それは欧州の諸大学に類似せりとは想ふべからず。学生の最多数は僧侶ボレンスか然らずんば僧侶たらんと学ぶ者どもなり。而して彼等の学業の主なる目的は和漢の文字を習ふに在り。彼等はまた諸宗派の教理即ち彼等の神学セオロジをも領得せんことを努む。尚ほ或は聊か天文学アストロノミーを、或は聊か医学メヂシンを修めんとす。然りと雖も教授並に学修の方法に於ては、欧州の諸学校に表はれたるが如き厳密なるシステムは絶無なりとす。尚又日本には綜合分科を有する唯一の大学あり。それは坂東地方、足利と呼ぶ處に在るなり」とあり、足利前掲書六〇四頁にこれを引いて天文学を足利学校の占筮術の意に解し、川瀬前掲書八九頁も同様の解釈を載せている。しかし新村博士の訳文に従えば、足利学校に関する特別の記事は「尚又日本には」以下の二三行のみに過ぎず、その前文は日本の諸大学の一般的状态を述べたものであり、天文学はむしろこれを曆道・算道などをいえるものとみた方が妥当のように思われる。

(8) 平泉澄「中世に於ける精神生活」三四一頁。

六

かの快元を以ていわゆる中興第一世の庠主とする足利学校の「住持世譜」は元来寛政九年新樂定撰修の足利学校蔵書目録の首に附せられたもので、「住持世譜略」という通り、極めて簡単なものである。いま足利衍述および川瀬博士の研究業績を参照しつつ、いささか考察を進めれば、まず快元はもと鎮倉円覚寺の僧であつたというが、住持世譜には、

中興第一世快元和尚、不知何許人、蓋其為人材幹過絶、興久廢之業、修庠序之旧、多積典籍、以教生徒、一如儒者事、爾來連綿以至于今、故以和尚為中興祖也、文明元年四月廿一日卒、

とあるのみで、その初めて足利学校に迎えられた年月は詳らかでない。ただ享保八年五月、学校から寺社奉行に提出した由緒書に、例によって学校を小野篁の創設とし、「篁子孫断絶之後、廢壞之事尚矣、住持闕如、于時五山派之僧快元住持、写書籍会学徒、講習無懈、其後関八州総副司上杉憲実之時修復、書籍等寄進之、自爾僧侶相統住持云々」といい、これによれば快元はいわゆる憲実の中興より以前から学校にいて学徒を教えていたということになる。また三要自筆の春秋経伝抄の首に先師九華の談として、快元が春秋を学ぶために入明を企てたが、大宰府天満宮において春秋の五事につき夢告を得、今は渡唐の要なしとて帰国したという所伝を載せている。快元の伝記資料として願みるに足るものはこの位であり、かれが果たして多くの典籍を学校に納れたか否かも詳らかでない。快元を易学の權威とし、その故にこそ中興第一世の庠主に請ぜられたのであるとするのは、学校の易が有名となつた後世の事実からの逆推であろう。かの柏舟が足利に遊んだのは快元が庠主であつたときに相違なく、従つて百衲襖の足利の易講の記事中に見える能化を快元とみることも可能であるが、その能化の易講は柏舟を満足させることのできぬ程度のものであつたのである。

このように快元が学校の中興第一世庠主として後世に名高い割合にその伝記が不明瞭であるのに比べれば、多少ましなのは第二世庠主天矣の場合である。もっとも住持世譜にはただ「二世天矣和尚、肥後人、延徳年間二月十六日卒」と伝えるのみであるが、学校現蔵の元天曆元年刊礼記集説の第一冊の奥に「延徳二年五月廿二日、能化肥後之座天矣、建仁寺大竜庵一牛藏主寄之」とあり、続いて別筆を以て「至徳二年六月十一日、以五条大外記家本移点了、某本之奥書曰、永和元年五月二日、以此本候禁裏御読訖、清原良賢」と記されている。すなわちこの本は天矣の庠主在職中に来遊した建仁寺僧一牛が、かつて入手した清家点本を学校に寄進したものであり、学校が新注学を撰取し、清家点を援用した事実を明らかにするものである。なお学校には易学啓蒙四冊合本一冊が現存し、そのものと四冊のおのの「能化肥後之天矣、洛之建仁大竜庵一牛寄置」なる奥記があり、さらに新樂定所撰の足利学校蔵書目録には「書経集注、同、全六冊、鄭季友音釈、蔡沈注ナリ、末ニ近江宗理置之、肥後之天矣ト記ス」と見えている。これらによれば天矣庠主当時の学校が上国から来た遊学者の寄進により、いよいよ新注書を整備しつつあったことがうかがわれる。ただしこれらの新注書の活用により、学校の学風が実際に影響を受けたのは、むしろ天矣の卒去後のこととなるかと思われるのであるが、かの住持世譜には「第三世庠主南斗、不知何許人」、「第四世九天和尚、不詳姓氏、在永正年間、以六月二日卒」、「第五世東井和尚、諱之好、吉川氏、大永年三月五日卒」などであるのみであり、この間の学校教育の状況を知ることができないのは遺憾である。ただ享和二年改正の学校の書目に、当時学校に存した文公家礼纂図集注が「武州児玉党吾那式部少輔寄附、永正三年丙寅八月日、野州足利学校、能化九天誌焉（下略）」なる奥記を有した由が見え、学校現存の元至正十一年刊詩集伝の見返しには「永正丁丑秋九月日修復焉、芸陽之、之好老人」の識語があり、さらにかの上杉憲房寄進の明初刊本十八史略一冊の奥には「大永丙戌小春日、藤公前年乙酉三月薨逝、依遺命今歲秋寄置、能化安芸州山県郡、之好叟述東井（花押）」なる記文があり、これらによって永正大永年間の学校が上杉氏の庇護のもとにひき続き安定を得、その文庫を充実しつつあったことを推察することができる。

るのである。

次に第六世庠主文伯についても住持世譜は「第六世文伯和尚、不知姓地、七月十六日卒」というのみであるが、月舟寿桂の幻雲稿に「東山文伯藏主、遊東関者数歳、頃旋洛無何而又東矣、詩以壮其行色云」などと見えるところによれば、かれはもと東山の僧であり、その東遊中に学才を見込まれ、一たん帰洛後再度東下して庠主となったようにも見受けられる。しかしかの寒松の「野州学校客殿本尊薬師如来安座」の文中に「文伯老人司業之時、享禄年中、学校値回禄之難」というに誤りがなくすれば、かれの晩年の不幸はまことに同情に値したことであろう。次の第七世庠主九華が学校の前途を疑い、帰郷しようとして北条氏康・氏政父子の論止するところとなり、やがて北条氏の後援を以て学校の隆運を回復したことは前述の通りである。

住持世譜には「第七世九華和尚、諱瑞興、自称九華老人、又号玉崗、大隅伊集院氏支族也、九華学業尤盛、生徒盖三千、在庠三十年、天正六年戊寅八月十日卒、年七十九」とある。生徒三千は、もとより孔子の学徒三千になぞらえたものであるが、学校の繁昌をいい得て妙である。また後年の庠主寒松の寒松稿卷三に収められた玉崗和尚三十三年忌頌并序によれば九華の学校における司業は天文十九年から天正六年に至る二十九年にわたり、在庠三十年はまさにその謂であることが判明する。またその大隅伊集院氏の支族という出自をみれば、九華が早くかのいわゆる薩南学派の影響を受けたことも考えられるが、かれが鎌倉で修業したことを伝えるのは学校由来記の九華の条の「始出世干禪興、号玉崗」という記事であり、かの応仁乱後鎌倉禅林唯一の文筆僧といわれた玉隠英興がこの禪興寺の八世住持であったことを参照すれば、九華の玉崗瑞興なる法号・法諱の由来は明らかであろう。従って九華の師玉隠が永正八年にかの東野州足利荒神堂記を撰したことなどが、後に九華が足利に赴任する機縁を作ったという想定も可能となるのである。九華が学徒の教育にすこぶる熱心であったことは右の由来記の後文に見える字降り松の説話によってもうかがわれるが、学校現蔵の九華自筆写本には論語集解零本一冊・論語集解五冊（後半別筆）・施氏七書講義十冊などがあり、九華の書き入れのあるものには古文尚書・尚書正義・毛

詩鄭箋・礼記などの写本のほかに元版礼記集説や北条氏寄進の宋版文選などがあり、九華の精勵を物語っている。特に最初に挙げた論語集解は零本ながら、別筆を以て皇侃・邢昺の疏などのほか新注をも書き入れてあり、学校が九華以後も依然新古二注折衷の学風を伝えていたことを立証する。殊に九華は学校赴任以来「周易講一百日会、十有六度、伝授之徒以上百人」に及んだというが、かれが北条氏の知遇を得た所以が、小田原において武家向きの三略のほかにさらにこの得意の周易を講じたことであつたように、時の侯伯の足利学徒に期待するところは易学・易筮の如き実用の才にあつた。九華が学校伝存の周易本義啓蒙翼伝写本三冊の外題を書き、またみづから重離疊變訣一卷を書写したのも、このような實際的要求に應せんためであつたろう。

この九華の後を承けて中興第八世の庠主となつた宗銀については、住持世譜に「八世宗銀和尚、日向人、在庠九年、十月廿日卒、其所筆蓋多、今存者、司馬光指掌図等不一、皆其手書也」とあるが、その指掌図はすでに佚して他にかれの手蹟を徴する由もなく、また東福寺の熙春竜喜の笑閣集に「利陽学庠教授銀公禪師、价人被需佳称、乃扞古月二字^レ応命」云々と見えるが、これから宗銀の法系をたどることも困難である。これに対し第九世庠主三要件こと閑室元佑は歴代庠主中最も著名な人物として、伝えられるところもまた比較的豊富である。三要件は肥前小城郡晴氣の城主千葉大隅守胤連の落胤として天正十七年に生まれ、永祿中に同国円通寺で出家し、天正のはじめごろ足利に遊び、庠主九華に従学した。時に東福寺の熙春も同じく学校に在り、三要件とともに九華の周易講義を聴いた。熙春が三要件の求めに応じ、閑室なる号を選んだのも、この同学の誼みによつたことであらう。天正十二年、熙春の病臥中、たまたま上洛した三要件がこれを訪れて旧師九華の七周忌に相当することを告げ、ともに師恩を偲んだが、その後三要件はまた足利に帰り、宗銀に代つて庠主となつた。かれの精勵も師の九華に劣らず、その自筆書き入れのある写本には古文尚書・尚書正義・毛詩鄭箋・論語集解・孟子趙注などがあり、上杉氏寄進の宋版毛詩注疏にも若干の書き入れをしており、北条氏寄進の宋版文選には全巻にわたつて加點している。このほか元版詩集伝・明版十八史略などには三要件所用

の印記があるが、三要自身の著述としては春秋経伝抄十八卷十八冊があり、先師九華の新古二注折衷の講説に基づきながら、さらに程子・周子・朱子などの諸説を引照して、かれの学識のほどをうかがわしめている。ただ三要が後年占筮を以て武家の殊遇にあずかったにもかかわらず、むかし先師九華の易説を謹聴したというほかに、かれ自身の易学講究の事蹟の著しいものを見ないのは不審であるが、これは占筮の実際における三要の卓越した手腕が、この不足を補って余りあったからでもあろうか。

足利学校がこの有能なる庠主を得て、恐らくかの九華の時代の隆盛を再現したころ、多年の庇護者であった小田原北条氏は天正十八年七月ついに滅亡した。翌年冬、学校は豊臣秀次から足利郡五箇郷のうち百石を安堵されたが、三要は狩野祐清筆聖像四幅および五経注疏など学校の貴重な什物・典籍を携え、秀次に従って上洛しなければならなかった。これは恐らく秀次が足利学校の最も優秀な要素を抜いてこれを京都に移し、新しい学校を興そうとしたものであろう。然るに文祿四年七月、秀次の自尽によってこの事は実現しなかったが、三要はそのまま上方に留まったらしく、慶長二年九月、伏見において家康に謁し、同十月には家康のために毛詩を講じ、また同四年以来家康の典籍開版事業に携わり、関が原役には著策をとって従軍し、この間なお伏見円光寺学校創立の事に当り、さらに相国寺中において寺社の訴えを聴き、板倉勝重とともに政務を処理するなど、幕藩制成立期の徳川政権のために数々貢献する所があった。慶長七年十一月、三要が自己の後任者として家康に推薦した寒松に学校の庠主を譲り、正式に足利から退いたのも、三要の上国における使命が、東国を顧みる余裕を与えなかったからである。寒松は相模の人、円覚寺の奇文禅才の門に入って竜派禅珠と号し、天正初年足利学校におもむいて三要とともに九華の易講に侍し、その後武蔵足立郡芝村なる建長寺末長得寺に住した。北条氏の滅亡後、寒松は家康に従い、江戸城中富士見亭文庫の事にあずかった。かれが足利の庠主となったのはこの後まもなくのことであるが、依然として長徳寺の住持であり、時に足利に往来する程度であった。そもそも足利学校は創設以来終始武家の庇護のもとにあったが、庠主が武家の御用のために学

校を外にすること数年に及んだのは三要以前には未だ見ざるところである。もし学校存立の教育史的意義がなお認められていたならば、この数年間の空白をとり戻すために、幕府は特別の措置の必要を感じたことであろう。然るに後任の庠主さえ、武蔵の寺院との兼務で事足りるとされたのは、足利学校の重要性が急速に薄れつつあったことを物語るものではないか。川瀬博士は寒松以来、学校はひき続き易学を中心とする授業を行なったが、来学者は多く前代的情勢によってここに集まるまでであり、中にはただ寒松その人を慕って来遊する者も少くなかったことを指摘し、その理由として、かの占筮を中心とする武家の軍事顧問という、足利学徒に対する前代の社会的要求がすでに消滅に瀕していたことを挙げている。⁽⁴⁾

注

(1) 川瀬一馬「足利学校の研究」八頁および一〇五頁にこの種の記事を後人の誤解として斥けている。学校を憲実の創設に係るものとする川瀬博士の立場からすれば当然の否定であろう。

(2) 第五節注(5)参照。

(3) このほか同書第二冊の奥には「延徳二年壬午五月廿二日、能化肥後之産天矣、賀州之産洛建仁之僧一牛寄之」、第三冊の奥に「延徳二年壬午五月廿二日、能化肥後之産天矣、建仁寺大竜庵一牛藏主寄之」、第五冊の末に「能化天矣御代、建仁寺大竜庵一牛藏主寄置、長門之西燕誌之」とあり、なお第一冊の尾に九華の筆を以て「天文廿二年勘之百七十二年也」と記されている。

(4) 鎌倉市史社寺編三三七頁。

(5) 学校由来記にいう、「第七世九華和尚、師諱瑞興、自称九華老人、大隅伊集院之一族、始出世于禪興、号玉崗、此時儒学盛、而学徒凡有三千、聖廟前有一松樹、学徒見書有不解者、書紙于不解之語、貼樹辺、則師毎日徧見以正之、書其解語于其傍、以教諭学徒云々、時俗迄今曰之字降松」と。川瀬前掲書一一七頁参照。

(6) 足利学校遺蹟図書館現蔵宋版文選卷二十九末九華自筆識語(本文中に前出)。なお足利学校現蔵扁鵲公列伝写本一冊も九華が世の実用的要求にこたえんがために手写したものであろう。川瀬前掲書一二三頁参照。

(7) 学校由来記。足利学校住持世譜略。熙春竜喜「清溪稿」所収、利陽能化前禪興玉崗大禪師七周忌之辰の文詞。同「笑闇集」所収、閑室号説。川瀬前掲書一三五頁以下参照。なお川瀬博士は慶長五年三月二十二日、三要が南禪の公帖を賜わった際の西笑承兌作の陸座語(南陽稿所収)に「前建長閑室和尚住南禪山門」と題するのを引いて、三要が鎌倉にいたこともあったであろうというが、建長寺住持歴代の中に閑室元信の名は見えない。これは右の玉崗の前禪興と同様、不住と解すべきであろう。

(8) 右文故事附録卷四、足利学校条所載寛文五年七月十一日朱印状。

(9) 鹿苑日録慶長二年九月十七日条。同十月廿八日条。

(10) 寒松稿卷二、奉呈円光寺長老并序。

(11) 学校由来記、住持世譜略などの寒松伝には誤りが多い。ここには川瀬前掲書二六七頁に新たに考訂記述されたところを援用した。

(12) 川瀬前掲書二七六頁。

顧みれば室町幕府の成立以来、禪宗はますます足利將軍家の外護にあずかり、いわゆる五山叢林の盛觀を現出し、諸長老は、もはや必ずしも儒教的口吻を借りるに及ばず、ただ詩文の才を以て大檀那の風流に和せば足りるに至ったが、この間門派の分立が進展した余り、門派の数において飽和点に達し、自然叢林に所を得ない多くの禪僧が中央から脱落して地方に分散し、各所にいわゆる林下を形成する傾向が著しくなった。¹⁾元來禪宗はその思想が極めて難解である上に、清規もすこぶる嚴肅であるため、権門勢家の外護にたよらずしてはその叢林を維持することが特に困難であったが、このようにして叢林を維持すれば、例えば大檀那のために日夜祈禱を修する如き、禪宗本来の面目にふさわしからぬ行儀をもあえて辞することができなかった。まして各地の林下がその存立を保つためには地方的勢力との連携を求めざるを得ず、その際には必ずしも正統的禪風に固執せず、むしろ地方の實際的要求に即応しなければならなかったのである。こういう禅林史の大勢を念頭において足利学校における禅僧たちの地位を顧みるとき、一つの大

きな発見は、歴代の庠主をはじめ、その学徒の多くが叢林に所を得たとは認められないことである。⁽¹⁾思うに学校におけるかれらの業績は林下の活動の一形態とみるべきであろう。元来戦国の世における地方の学校がその存在価値を発揮するために、武家にとって死活的關係にある占筮の教授に主力を注ぐのは最も賢明な方策であったが、この占筮という「異術」の教授者または担当者として武家の帰依を得ることは、林下の人々にとって無二の活路であったと考えられる。ただしこの異術の理論的基礎としての易学は、必ずしも性理学の奥義に達したものであることを要せず、かの太極図説を主とする周子の易説の程度で十分であった。これは足利学校所蔵の易書の外題を一覧しただけでも察せられるところであろう。従って足利学校の占筮がいかに天下の通りものとなったとしても、それは学校の学問的水準の高さを意味するものではなかったのである。かの上杉憲実のいわゆる永享の再興が、学校の経学の振興をめざすものであったにもかかわらず、足利の学問がついに常套的新古折衷を出でず、まして日本宋学史の進展に何ら寄与し得たにもかかわらず、近世宋学の首唱者の地位を藤原惺窩や林羅山に譲らなければならなかった事実に徴しても明らかに了解されることと思われるのである。

注

(1) 玉村竹二「日本中世禅林における臨済・曹洞両宗の異同」(史学雜誌五九の七・八、昭和二十五年)。

(2) 足利学校の学徒の経歴については川瀬一馬「足利学校の研究」一五四頁以下の詳密な記述に譲り、ここにはあえて省略に従うことにする。
(昭和三十六年九月四日稿)

A New Study of Ashikaga Gakko (II)

Résumé

When Norizane Uesugi reestablished Ashikaga Gakko, he intended that this Confucian seminary should become an academic centre in his Ashikaga manor. It was said in a lecture given by Giyo, a Zen high-priest supervised Tofukuji Temple in Kyoto about 1400, that the masters of Ashikaga Gakko adhered to the old interpretation of the Confucian scriptures, being quite indifferent to the new interpretation given by Chu Hsi before 1200. But now we can see in the library of Ashikaga Gakko some scriptures interpreted in accordance with Chu Hsi's theory. Moreover, the Gakko had its own rendering of scriptures with slightly provincial accent. This special method prevailed all over Japan, wherever the graduates from the Gakko were accepted.

It was by the practical art of divination, rather than by the new interpretation of the Yi-King, or the Book of Change, that Ashikaga Gakko became most famous throughout the age of civil wars, because the art was quite indispensable for the rival chiefs of the age. We can easily find out that most books belonged to the Gakko were those concerning philosophy of change, though not necessarily stood on Chu Hsi's theory. Even Shingen Takeda, one of the greatest chiefs of the age, appreciated Ashikaga Gakko art of divination most highly, because he trusted in its theological standard. Towards the end of the age, or in the latter half of the 16th. century, Ashikaga Gakko looked like a normal school for the art of divination, a good number of its graduates being engaged in feudal government of various *daimyo*.

The list of the presidents of Ashikaga Gakko since Norizane's revival is as follows: (1) Kaigen; (2) Ten'i; (3) Nanto; (4) Kyuten; (5) Tosei; (6) Bumpaku; (7) Kyukwa; (8) Sogin; (9)

Sanyo; (10) Kansho. They were all Zen priests, and some of them are more noted, while the others were known only by the name. Kaigen, in my point of view, was not necessarily an expert in divining, for his life in Ashikaga preceded the rise of the famous Ashikaga Gakko divination. Kyukwa was disappointed of the reestablishment of the Gakko after its disasters since 1528. Fortunately, however, he got a new great supporters, Ujyasu Hojo, and his son, Ujimasa, in stead of the declining Uesugi family, and it seemed that this gave the Gakko the chance of change for the normal school of divination. Sanyo is most famous for his divining service to Ieyasu Tokugawa, who trusted in him and planned to remove Ashikaga Gakko to Fushimi near Kyoto. But the rapid growth of Ieyasu's Empire after the death of Hideyoshi Toyotomi did not make the plan urgent, and the art of divination itself also became less necessary.

Here we can find the reason why Ashikaga Gakko did not recover significance of its existence, and why it could not promote popularization of Neo-Confucianism according to Chu Hsi's theory.